

ている。

自然環境である地形条件に影響されていた土地利用が、戦後の日本農業の米作指向による陸田化の中で実施された土地改良事業等により土地生産性を向上させた。しかしこのことは農業の機械化に伴ない兼業化を進める結果となっている。今後は土地生産性の向上を目指すと共に、兼業農家の耕作不能の耕地を専業農家に貸して規模の拡大を図ることが必要と思われる。

小松市の工業に関する地理学的考察

四ヶ浦 京子

人口約10万をもつ石川県小松市は、第2次産業のウエイトが高く、石川県においても、その生産活動は大きく、金沢市と並ぶ主要工業都市として位置づけられる。工業の内容は伝統的な絹織物から発達した繊維工業と、大正時代に当市に創立した「小松製作所」を主軸に発達をみた機械工業、及び市の工業に占める比重は小さいが、特色ある九谷焼工業などがある。

論文では、このような小松市の工業の発達過程をたどりながら、工業化によって、当市がどのように変容してきたかを考察し、さらに、現在の工業の地域構造を明らかにしようとしたものである。

Ⅱ章では、工業化段階を都市化と関連づけて、3つの時期に区分した。以下は、その時期区分である。

・Ⅰ期（江戸～明治）・・・農業の副業として発達した絹織物が明治に入り、市街地に工場制の工場を発達させた。この時期は、工業化の萌芽期である。農村地域は、絹織物の原料供給地として養蚕業の発達をみた。

・Ⅱ期（大正～第2次世界大戦）・・・新たに機械工業の発達をみ、今日の機械・繊維工業を主軸とする業種構成が確立する。繊維工業は近代化され、最盛期を迎えるが、一方、農村地域では、養蚕業の没落とともに、農業労働者から、工業労働者への変動がみられ、戦時体制下では、さらにその傾向が強まる。工場立地も、従来の市街地外延部に限られていたのが、小松製作所粟津工場の郊外への進出をきっかけに、郊外にも都市化を引き起す要因となる。

・Ⅲ期（戦後）・・・戦後、特に30年代以降日本経済の高度成長に伴い、当市でも、工業化・都市化の進展をみる。農村地域では、農地転用面積の増大、農家数の激減をみる。

しかし、小松市の工業化の特徴は、地元資本の工業が時代とともに発達したもので、外部からの大企業の進出にみる急激な工業化・都市化はみられない。Ⅲ章では、このような小松市の工業の現状を考察するとともに、市の工業の地域構造を明らかにし、Ⅳ章で総括して、工業の特色と問題点を上げた。以下、その問題点となるものである。

小松市の工業の特色として、業種構成の著しい偏りがみられる。即ち、機械工業と繊維工業に特化しすぎており、この2業種で市の工業出荷額の9割以上、従業者数の8割以上を占めている。特に、機械工業は、小松製作所1社とその下請工場のみで成り立っており、大げさに言えば、大企業1社に市の50%以上が左右されている状態で、問題がある。一方、繊維工業は、伝統的な小幅織物を主力

としているため、比較的安定的であるが、市に染色工業が発達しておらず、そのほとんどが中間商品として（白地のまま）、京都などに出荷されているという状態で、付加価値が低い。九谷焼工業については、後継者となる若年・青壮年層の労働力不足が深刻な問題となっている。また、市の工場が、そのほとんどが自然発生的に立地したもので、市街地の中心地や住宅街にも工場集積が著しく、近年、安宅地区などの郊外への工場移転が計られている。

陶器産業の地域性

— 信楽・備前・丹波の比較研究 —

鈴木朝子

(1) 目的

信楽・備前・丹波の窯は中世六古窯のうちでも、一時としてとだえることなく、さりとて大産地化または大企業化することもなく、8世紀以上に渡って続いている窯である。これらの伝統陶業のあり方は、各地域の環境とそれへの人間の対処のし方を濃厚に反映していると考えられる。その発達にはどのような要因が係わり、それによってどのような陶業が生まれたか。また、現時点で、各陶業の異質性と共通性はどのように捉えられるか、今後の本質的な問題は何か。

(2) 方針

まず、各陶業地域を比較地誌的に論じた。特に「現在の陶業」を論じるためには、信楽については文献と諸統計から、備前については15製陶業者を含む各方面の方々への聞き取り調査から、丹波については47製陶業者を含む陶業地域内の55世帯へのアンケート調査から、資料を得た。最後に、現代的観点から、異質性・共通性及び問題点を探った。

(3) 結果

伝統陶業の成立要因は、(i)原料土、(ii)燃料、(iii)築窯適地としての傾斜地、である。次に、発達要因は、(i)各陶業地の位置と交通の条件、(ii)他産業への依存度、(iii)中世末から近世における権力者の庇護、(iv)原料土の性質と量、(v)明治以降の内部的努力と外部的援助、等である。これらの発達要因は、同次元で働いたものではなく、歴史とのかみ合いの上で理解されるべきである。

各陶業地における(i)～(v)の方向性に従って発達した各陶業の、現代における異質性は2つの観点からまとめられる。

(i) 陶業及び陶業地域内の性格

信楽陶業は、工業製品を基盤に置き、多くの零細・小企業と強力な組合組織と指導力のある窯業試験場によって展開されている。

備前陶業は、工芸品を対象とし、個々人が一品制作の形で営むのが基本的である。そこでは厳しい個性の競争が演じられている。

丹波陶業は、景気に応じて浮動的である。組合を通じて生産・流通体制を強化することもなく、外部の援助も得られず、零細業者が半農半工の形で営んでいる。社会的には血縁関係が濃く、このため